

## タイ深南部におけるイスラームと帰属意識

— イスラーム教育の場を事例に —

## Islamic Education and Sense of Belonging in the Deep South of Thailand

西 直 美\*

NISHI Naomi

This paper examines how Islamic education has defined relations between the Thai state and the Malay Muslims by examining 1) how Thailand, as a nation-state, has tried to accommodate its Muslim population through Islamic education; 2) the role of traditional education and the influence of Islamic reformism in the modern education system of the Deep South; and 3) the discourse on Islam and Islamic education in the Rueso district, Narathiwat Province, which many people consider to have a strong sense of belonging as Malay Muslims.

Since traditional Muslim education has been deeply intertwined with the local history and a sense of belonging of Malay Muslims in the Deep South of Thailand, Islamic education policies of the Thai government have followed the political agenda to separate ethnicity and religion, and accommodate the Malay Muslim population as Thai citizens. Islamic reformism as a world-wide phenomenon appeared in Thailand during the 1980s especially in higher education institutions. The common features of reformist concepts are 1) the tendency to favor literalist interpretations over popular customs; 2) to open up conservative Islamic traditionalists to modern influences; and 3) the standardization of Islamic knowledge, which is also observed in the modern education in the Deep South. In addition to these common features, the author found that sympathizers of reformist concepts in Rueso do not consider the local Malay language/culture/history as an essential aspect of Islam. In this sense, reformists are more compatible with the modern Thai education system. Whereas Islamic reformism is seen as a threat to national security in many countries, this study shows that Islamic reformism alongside the development of Islamic education promotes social integration of the Malay Muslim population in the context of Thailand.

## はじめに

本稿は、イスラームと帰属意識の関係について、深南部におけるイスラーム教育の場から考察を加える<sup>1)</sup>。とくに、イスラームの原典への回帰を志向する改革派が影響力を拡大するなかで問われてきた、タイ国家とのかかわりやムスリムとしての

あり方について検討したい。

深南部は、2004年1月4日にナラーティワート県の軍基地から大量の銃器が略奪された事件を境に、タイ政府と反政府武装勢力との間での抗争が市民を巻き込むかたちで激化したことで、大きな注目を集めるようになった。深南部はマレー系のスルタン王国パタニの故地であり、マレー語を母

\*同志社大学

語とするムスリムが多数を占めている<sup>2)</sup>。パタニが20世紀初頭に仏教王国シャムの領土に組み込まれて以降、近代国家の形成を目指すタイが掲げた「民族・仏教・国王」という価値と、マレー・ムスリムとしての帰属意識が、新たな境界の上で衝突してきた。

深南部に関する議論では、抑圧的なタイ政府に対しマイノリティであるマレー・ムスリムとしての帰属意識が深化するほど分離独立運動が激化する、という前提に立つ議論が主流を占めている<sup>3)</sup>。2004年以降の紛争激化に際しては、ジュマ・イスラーミーヤやイスラーム国といったジハード主義を掲げる国際テロ組織の関与が懸念されたが、深南部紛争はジハード主義ではなくマレー民族主義に基づく分離独立運動であると結論づけられている [International Crisis Group 2017: 25, Nilsen and Hara 2017: 17]。ここでの疑問は、イスラームをめぐる世界情勢がますます流動化する中で、民族としての帰属意識を強調する深南部像は、どの程度実情を反映しているのだろうかという点である。

近年指摘されるようになってきた論点が、深南部のマレー・ムスリムの間ではタイ・ムスリムとしての帰属意識が台頭していること、そして人々の帰属意識に対してイスラームが重要な役割を果たすようになってきていることである<sup>4)</sup>。しかし、こうした議論からは、タイ・ムスリムとしての帰属意識がどのように台頭し、イスラームがどのように重要になっているのかという点を読み取るのは困難である。そこで、本稿はこれまでの貴重な研究に大きく依拠しながら、深南部のイスラーム教育の場からイスラームと帰属意識に関する問題を考察してみたい。

本稿では、タイにおけるイスラーム教育の政治

的背景やカリキュラム内容の精査というより、現地の動向を重視しながらイスラームと帰属意識をめぐる一つの考察を提示することを目的としている。本稿の構成は3つに大別される。第1章は、タイにおけるイスラーム教育の位置付けについてである。タイ政府は深南部におけるイスラーム教育が安全保障上の脅威であるという認識から、管理統制を進めてきた。そこで追求されたのは、イスラーム教育のタイ語化である。本章では、バンコクと深南部の相互関係のなかで、イスラーム教育が多様化していることを指摘する。第2章は、深南部におけるイスラーム教育の場についてである。深南部における伝統的イスラーム教育は、反政府的な思想を涵養する場であるとして、タイ政府により問題視されてきた。ここでは、深南部において伝統的イスラーム教育の持つ役割を検討したのち、1980年代以降顕著になったイスラームの原典への回帰を志向するイスラーム復興運動の動向について述べる。その上で、第3章において、現地におけるイスラーム教育をめぐる語りについて検討する。以上の考察を通じて、タイにおけるイスラーム教育は、原典回帰的なイスラーム解釈に基づくムスリムとしての帰属意識をより上位に置く改革派の台頭と相まって、伝統的イスラーム解釈に裏打ちされたマレー・ムスリムとしての帰属意識を相対化する方向で働いた側面があることを指摘したい。

本稿で用いた現地調査のデータは主に、ナラティワート県ルース郡で行った調査に基づく<sup>5)</sup>。ルース郡は、BRN (Barisan Revolusi Nasional Melayu Patani: パタニ・マレー民族革命戦線) 設立と関係が深い地である。BRNは、1960年にタイ政府の教育政策に反対するイスラーム指導者らによって

結成され、2005年以降の政府との秘密会談、2013年以降インラック政権下で開始された和平対話においても重要な役割を果たしている分離独立派組織の一つである<sup>6)</sup>。本稿では、民族について言語、宗教、歴史、文化、慣習を共有する人々の集団であると捉え、帰属意識とは民族を含めて特定の集団の一員であるという意識を示すものとして用いる。

## 1. タイにおけるイスラーム教育の位置付け

### (1) 私立学校におけるイスラーム教育の管理統制

仏教徒が圧倒的多数派を占めるタイは、国家としてイスラーム教育とどのように向き合ってきたのだろうか。タイにおけるイスラーム教育政策は、マレー・ムスリムが人口の多数を占める深南部にかかわる政策として展開してきた。深南部において、タイ政府の正統性を危機に陥れたのは、伝統的な寄宿型宗教塾であるポーノに対する管理統制と仏教の影響が強い初等教育の普及であった。ポーノは1918年に制定された私立学校法の規制の対象となっていたが、その多くは統制を免れていた [Numan 2010: 158, Kanniga 1984: 265]<sup>7)</sup>。マレー・ムスリムの分離独立運動の温床とみなされたポーノに対する管理統制が本格化したのは、サリット・タナラット政権下の1960年である。同年11月12日から17日、第2教育区（パッターニー県、ヤラー県、ナラーティワート県、サトゥーン県）において、ポーノの教育に関する会議が初めて開かれ、ト・クルー（ポーノの指導者）の意識変革とともに、ポーノの教育省への登録、ポーノ名の設定、校舎や校舎周辺のインフラストラクチャー整備、クラス・進級制度の導入や学力評価基準の

設定、タイ語教育の実施による教育の質の向上の必要性が提起された [Muhammadruyani 2011: 21]。それに基づき、1961年に告示された「仏暦2504年第2教育区におけるポーノ改編推進に関する教育省規則」では、ポーノの教育省への登録を促すと同時に、登録したポーノに対しては金銭的な支援に加え、タイ語と職業訓練を行う教員の派遣が開始されている。中等教育レベル以降に限定して、前期課程・イプティダイヤ（4年）、中期課程・ムタワシット（3年）、後期課程・サナウィヤ（2年）の段階に沿い、週27時間のイスラーム教育、4時間のタイ語教育、4時間の職業訓練を行うカリキュラムが示された<sup>8)</sup>。

宗教指導者のなかには、タイ政府による教育への介入をポーノが深南部において果たしてきた役割に対する脅威であり、イスラームの破壊を試みるものであると見做す者も多く、1960年代以降に数多くの分離独立運動が興隆している<sup>9)</sup>。1966年6月20日、国家安全保障委員会の勧告によって、新たなポーノの設立禁止が決定された。さらに、既存のすべてのポーノに対して、半年以内に私立学校として登録すること、3～5年以内に私立学校に順次改編していくことを義務付け、未登録のものは閉校処分にするなどの措置を取った [Muhammadruyani 2011: 22]。

1973年から1976年の民主政権期においても、ポーノでのイスラーム教育はタイ政府のマレー・ムスリムに対する同化政策を阻害する要因として認識されていた [Ornanong 2001: 138]。一方で、私立イスラーム学校を志向する指導者によって、普通教育とイスラーム教育を午前・午後に分けて実施するなどの試みが行われ始めたのも、この時期であった [小野沢 1985: 253, 村田 2007: 186]。

私立イスラーム学校はしだいに増え、1976年末には第2教育区内の488校のポーノが登録を済ませている [Muhammadruyani 2011: 23]。

1977年から1981年に実施された「私立イスラーム学校開発計画」では、校舎等のインフラストラクチャー、学校の組織編成、教材、指導方法、学力の評価基準等、補助金の受給要件が示されるとともに、普通教育カリキュラム実施のための人材や教材の支援が実施された<sup>10)</sup>。1982年の私立学校法制定以降、校舎、学校組織、学生数や教員数の基準を満たし、学校制度内の教育を行う学校を15条1項学校として、イスラーム教育のみを行う15条2項学校と区別し、法的地位の格上げを行っている。

深南部における私立イスラーム学校では、タイ語による普通教育課程とポーノの歴史から引き継いだ宗教教育課程が1つの学校に併存することが一般的となった。同時に、深南部の学校関係者や研究者、教育省の共同作業によって私立イスラーム教育カリキュラムの標準化が進み、現在用いられているのは、普通教育課程との差を解消する目的で2003年に定められた12年一貫の「仏暦2546年イスラーム教育カリキュラム」である<sup>11)</sup>。2015年に運用が開始された、全国統一イスラーム試験(I-NET)が依拠するのも、当該カリキュラムである<sup>12)</sup>。

2003年以降、従来は中学校以上で認められていたイスラーム教育について、小学校から実施することが可能となった。しかし、私立イスラーム学校の多くは6年の中高一貫校であり、依然として宗教教育課程と普通教育課程の整合性が問題となっている。また、学校によっては、1980年代以降に定着した宗教教育課程の10段階を用いている

場合がみられる。初等教育段階までにイプティダイヤを修了していることが望ましいが、私立イスラーム中学校入学後から宗教教育課程を開始する学生も多い。高校までの普通教育課程6年間で宗教教育課程を修了できず、かつ宗教教育課程の修了証を望む者は、在籍年数を伸ばすか各県のイスラーム委員会で資格審査を受けることが可能である。こうした問題を解決するため、大学の研究者や教育省の担当官によって、普通科目と宗教科目を統合するラックースト・ベープ・ブーラーカーン(統合カリキュラム)の制定が進められている。

政府の試みにもかかわらず、深南部には依然として未登録のポーノも存在していた。2004年以降の深南部情勢の悪化を受け、タクシン政権は政府の管理下に無いイスラーム教育が分離独立運動の背景にあると批判し、未登録のポーノに対する管理統制を強化している。伝統的なイスラーム教育の管理統制は、支援と法的規制の両輪の下で、私立イスラーム学校化することによって進められてきた。しかし、各学校が独自にカリキュラムを編成できる余地が大きかったため、私立イスラーム学校毎に特色あるイスラーム教育が実施されるようになっているのが実情である<sup>13)</sup>。

## (2) 公立学校におけるイスラーム教育の導入

深南部で公立小学校の数が増加したのは、1961年の第1次国家経済開発計画によって、開発重点地域に指定されてからである。公立小学校における初等教育は、タイ語を教授言語とし、朝礼の際に合掌して経を唱えることや仏教教育が実施されるなど、仏教の影響が強かったこともあり、深南部では支持を得られなかった。強権的な同化政策

が大きな反発を招いたことから、教育省は1975年11月にマレー・ムスリムが多数派を占める南部国境4県におけるニーズを考慮して、初等教育課程におけるイスラーム教育の開講を認める省令を告示した。第2教育区の教員、教育監督官、イスラーム教育担当者ら30名によってカリキュラムの草稿が策定され、1976年6月「仏暦2519年イスラーム教育カリキュラム」として認可された[Mirfat 2008: 11]。深南部の第2教育区のムスリム児童が過半数を占める小学校において、タイ語と一部マレー語を用いたイスラーム教育を週5時間以内実施することが可能となった。1978年には、学校教育制度が4・3・3・2制から現行の6・3・3制に移行し、初等教育改革が実施された。第2教育区内では、初等教育課程におけるイスラーム教育改革の必要性に対する認識が共有されるようになり、しだいにイスラーム教育をタイ語で行うカリキュラムや教員に対する試験制度、研修プログラムが整備されていった[Mirfat 2008:12, 14-15]。

深南部に関する包括的な統合政策の嚆矢として注目されるのが、1978年1月24日に承認された「南部国境県に関する国家安全保障問題解決のための政策」である。その多くが、タイ語教育に関する記述に割かれており、マレー・ムスリムに意思疎通が十分にできる程度のタイ語を身に着けさせる、ムスリムの若者に対して子供の頃からタイ語の知識を教育するといったことに加え、公立学校でのイスラーム教育の導入や、ムスリムに対するアフーマティブアクションが掲げられている。

1981年の教育省令により「仏暦2523年初等教育段階におけるイスラーム教育カリキュラム」が告示され、イスラーム教育が南部4県とソクク

ラー県の一部の小学校で正規の必修科目として認可された。公立学校のムスリム児童に対して、週2時間または1クラス6コマ（1コマ20分）のタイ語を用いたイスラーム教育が公式に認められたのである。1982年には前期中等教育課程、1984年には後期中等教育課程においても週2コマ（1コマ50分）のイスラーム教育が認められるようになった。

1960年代以降の教育政策は、タイ人化を目的とした同化政策の要素が強かった。1970年代後半には、マレー・ムスリムの文化を一部認めつつ、マレー・ムスリムの若年層を市民化し、タイ社会に統合していくことが重視されるようになった。政府は、タイ語教育やイスラーム教育の拡充と、大学入学や公務員採用におけるアフーマティブアクションを用いる統合政策へと舵を切ったといえる。1980年代以降の経済発展と民主化の流れとともに、マレー・ムスリムの社会参加が進み、1990年には初等教育の就学率は85.6%に達している[鈴木 1999: 104]。また、1995年10月の教育省の決定により、それまで禁止されていたムスリム女性教員と女子学生に対するスカーフの着用が認められ、1997年の教育省規則改定によって学校における宗教的シンボルの着用が許可されるようになった。さらに同年、第2教育区に限って認められてきたイスラーム教育が、全国的に認められるようになっている。

12年間の無償基礎教育を受ける権利が定められた1997年憲法に基づき、1999年国家教育法が制定された。イスラーム教育は国家教育法を受けて制定された2001年基礎教育カリキュラムが定める8つのグループのうち、④社会科・宗教・文化グループに含まれるとされ、自らの信仰する宗教の

教義を学び、信仰を日々の生活で実践し、多様な価値観の平和的共生の基盤とする、という記述に基づいて策定・実施されることとなった〔鈴木2005:125〕。教育省は、2003年8月「仏暦2544年基礎教育カリキュラムに基づく社会科・宗教・文化学習内容グループにおけるイスラーム教育の学習内容」を告示している。

公立学校におけるイスラーム教育のさらなる拡充は、教育省基礎教育委員会のイスラーム教育開発計画、通称イスラーム・ベープ・ケム（イスラーム強化方式）と呼ばれる、私立イスラーム学校に匹敵するカリキュラムの導入を機に生じている。イスラーム・ベープ・ケムは、深南部における紛争激化を受けて、2006年に地域の実情に合わせた教育を実施するという目的で導入された<sup>14)</sup>。以降、私立イスラーム学校で用いられる「仏暦2546年イスラーム教育カリキュラム」に依拠した教育が実施された。パッターニー県、ヤラー県、ナラーティワート県、ソクラー県、サトゥーン県において、2006年には142校が、2009年には276校が登録され、2016年時点では350校がベープ・ケム校として認可されている〔Office of the Basic Education Commission 2016: 43〕。現在は、2008年基礎教育コア・カリキュラムを受けて告示された「仏暦2551年基礎教育コア・カリキュラムに基づくイスラーム教育カリキュラム」の下、週8～10時間以内のイスラーム教育を実施することができるになっている<sup>15)</sup>。本カリキュラムの学習内容も全国統一イスラーム試験（I-NET）と連動しており、ベープ・ケム校の宗教課程修了者にはイスラーム学の修了資格が与えられる。

私立イスラーム学校の支援・管理統制と公立学校におけるイスラーム教育の導入は、深南部マ

レー・ムスリムの統合政策の一環であった。政府は、マレー・ムスリムとしての帰属意識から世界宗教であるイスラームを分離することを目指してきたともいえる。政府によるイスラーム教育カリキュラムの策定が行われるようになったことは、国家がイスラーム教育自体を脅威だとは見做しておらず公式に認知されたことを示している。一方で、政府による深南部のイスラーム教育に対する疑念と、それに裏打ちされた管理統制をも意味していた。1960年以降の政府のイスラーム教育政策の結果、深南部におけるイスラーム教育は多様化している。教育を通じて行われてきた同化・統合政策の結果、タイ語を不自由なく話す人が増え、深南部のとくに都市部ではマレー語を話すことができない者も増えている。こうした状況下において、ポーノに代表される伝統的なイスラーム教育機関は、マレー・ムスリムにとってどのような意味を持つのか、以下に検討していく。

## 2. 多様化するイスラーム教育と伝統教育の役割

### (1) 深南部におけるイスラーム伝統教育

現在、タイの普通教育は就学前教育としてアヌバーン、初等教育としてプラトムスクサー（6年）、前期中等教育としてマッタヨムトン（3年）、後期中等教育としてマッタヨムプラーイ（3年）、高等教育としてはウドムスクサー（4年）が存在する。イスラーム教育に関しては、就学前教育としてラウダ（アラビア語で幼稚園）、初等教育としてイプティダイヤ（アラビア語で小学校）、中等教育としてムタワシット（アラビア語で中学校）、後期中等教育としてサナウィヤ（アラビア語で高校）

が存在しているが、普通教育課程と必ずしも連動していない。

公立学校におけるイスラームの学習時間は、ベープ・ケム校を除いて、私立イスラーム学校と比較して少ない。ルーソ郡のベープ・ケム校の宗教担当教員によると、ベープ・ケム校は近隣の私立イスラーム学校のカリキュラムを参照している場合が多く、人々はイスラーム教育の長い歴史を持つ私立イスラーム学校の質をより高く評価している<sup>16)</sup>。ポーノとターディーカーは、イスラーム教育のみを行う機関である。両者は教育省の監督下に入っているが、学校制度外の教育であるため、大学等に進学することはできない。

マレー・ムスリムとしての帰属意識の維持・継承に果たした役割が大きいのが、ポーノとターディーカーである [Ibrahem 2005]。19世紀後半、タイにおける国民教育は、仏教寺院内に設置された寺院学校から始まった。とくに1921年の義務教育法制定は、深南部のマレー・ムスリムのマレーシアへの移住や、政府への反乱を引き起こした。深南部において重要な位置を占めてきたポーノやターディーカーは、いわば緩衝帯としてタイ仏教文化からの影響を緩和する役割を果たしてきたといえる。

タイの学校制度が普及する1960年代以前、深南部におけるイスラーム教育機関には、ポーノとマドラサが存在した。ポーノは、インドネシア、マレーシアではポンドック、プサントレンと呼ばれる寄宿型宗教塾である。アラビア語で宿を意味するフォンドックに由来するとされ、ト・クルーあるいはバーボーと呼ばれる指導者の住まいの周囲に学生たちが小屋を建てて住む形式が典型的である。17世紀頃から存在するといわれるポーノでは、

クラスや進級制度はなく、何をどのように学ぶかはバーボーに依る部分が大きい。

ポーノでの一日の生活は5回の礼拝を軸にして、アラビア語やヤーウィで記された、シャーフイー学派の教本を学んでいく。ポーノは一般的に男性のみを受入れるが、女性を受け入れるポーノも存在する。その場合、バーボーの配偶者であるマーマーが指導を担う場合や、男女の間に仕切りが設置され、男性側から教授する方式がみられる。ポーノで学ぶにあたって特定の要件はなく、自分で自分の面倒を見られるようになれば、自分が学びたいと思うバーボーのいるポーノを訪れて学ぶ。

人々の喜捨や、バーボーの保有する土地からの収入が、ポーノの経営を支えている。ポーノ内では自給自足が旨とされており、貧しい家庭の子弟や孤児、身寄りの無い者の受け入れ先としても機能している。ゴム園で働きながら年に数か月学びに来る者など、学びの形態は学校と比較すると自由である。バーボーになる者は、早くは10代前半から10年以上にわたって各地のポーノを渡り歩いて学び、30代から40代にかけて自立する。

政府からの圧力が大きくなった2004年以降もポーノの数は増えており、ルーソ内では8ヶ所（2ヶ所は名前のみ登録）のうち、2ヶ所が2005年以降に運営が開始されたものであった<sup>17)</sup>。いずれも深南部地域のポーノで学んだバーボーによって設立されており、バーボーが自分の生まれ育った村に知識を還元することを目的として親族の所有する土地にポーノを建設した事例と、バーボーと婚姻関係を持った裕福な家庭出身の女性が徳を積む目的でポーノの建設を行う事例が存在した。宗教教育への資金援助は、コミュニティへの奉仕を重

視するイスラームの教えからも、徳の高い行為とみなされる。

アラビア語で学校を意味するマドラサは数としては少なかったものの、20世紀初頭から中頃に中東留学経験者によって設立されたもので、クラス・進級制度が導入されていた。マドラサにおける講義ではアラビア語とマレー語が用いられ、数学や科学の講義も行われていた<sup>18)</sup>。現在、マドラサと呼びうるのは私立イスラーム学校であるが、マドラサという呼称は一般的ではない。私立イスラーム学校の多くは前身がポーノであったことから、ポーノと言うと、たいてい私立イスラーム学校のことを示している。宗教のみを教えるポーノは、ポーノ・ダンドゥーム（伝統的ポーノ）と呼び分けられる。

ターディーカーは、モスク付属の宗教教育のみを行う初等教育機関である。マレーシア語で幼稚園を意味するタマン・ディディカン・カナック・カナックの頭文字に由来し、タイでは子供にアラビア語の読み書きや礼拝作法といった基礎教育を行う場を指している。ターディーカーは、1950年代から60年代のタイ政府による義務教育の拡充政策と軌を一にするように増加した。この呼称が普及する以前は、タイの公立学校のことをマレー語でスコラ・シーエ（タイ学校）、イスラームについて学ぶ施設のことをスコラ・マラーユー（マレー学校）と呼んでいた [Numan 2010: 246]。イスラームがマレーと結び付けられ、公教育がタイ人のものとみなされていたことが、こうした呼称からうかがえる。現地では今でも、ターディーカーがスコラ・マラーユーと呼ばれることは多く、まれに公立学校がスコラ・シーエと表現される場合もあった。

現在は土日に開講されるターディーカーだが、かつては金曜日以外の毎朝・夕に、イマームや地域の知識人が無給で子供に教える光景が見られた。2005年以降、ターディーカーは教育省の監督下に入り、各郡の私立教育委員会が監査などの実務を担っている。ターディーカー教員は、サナウィヤの修了資格を持ち、18歳以上であることが定められた。ターディーカーにより異なるが、教員には月に1000～3000バーツ程度の給与が支払われている。深南部には2000近くのターディーカーがあるともいわれ [The World Bank 2015]、1つの村に最低1つのターディーカーが存在する。ポーノやターディーカーは長らく政府による支援や管理統制を受けることがなく、コミュニティの人々の尽力によって維持されてきた。教育省の監督下に入ったのちでも、完全な管理統制下にあるとはいえないのが現状である。

## (2) イスラーム改革派と高等教育の拡充

イスラーム世界で19世紀後半に生じたイスラーム改革思想、そして1970年代以降世界各地で観察されたイスラーム復興運動は、深南部のイスラーム教育にも影響を与えている<sup>19)</sup>。深南部で語り継がれる象徴的人物であり、タイにおけるイスラーム改革者の最初期に位置付けられるのが、ハジスロン・アブドゥルカーデー（以下ハジスロン）である。1927年にメッカから帰郷したハジスロンは、人々の迷信に満ちたイスラーム実践を目の当たりにし、自身がメッカで学んだクルアーンに基づく教えを人々に伝える責任を感じた [Ockey 2011: 107]。各地を回ってダアワ（イスラームへの招待、宣教）を行い、1933年には深南部で初めてのマドラサをパッターニー県に建設した [Ibrahim and



Numan 2010: 106]。エジプト人のイスラーム改革思想家ムハンマド・アブドゥの影響を強く受けたハジスロンは、教育改革のみならず深南部の自治を目指す政治活動も積極的に行った。ハジスロンの行動は、一部の保守的なイスラーム指導者やタイ政府との間に軋轢を生じさせたが、多くの民衆の支持を得ていった [Numan 2010:175-180]。ハジスロンは、1948年に国家反逆罪で逮捕され、1953年の出所後に行方不明となった。警察によって殺害されたと信じられている。

現在に続く宗教社会現象であるイスラーム復興の流れは、1970年代の石油危機と資源ナショナリズム、ソ連のアフガニスタン侵攻、イラン革命を経て、タイでは80年代に顕在化した。既存社会の特定の慣習を排除し、原典に則った改革を志向するイスラーム復興運動の影響は、とくに都市中間層の間に強くみられることが指摘されてきた [Joll 2011; Muhammad Illyas 2014]。タイにおいてイスラーム復興運動を担ってきたのは、サラフィー主義とタブリーギー・ジャマアト（以下タブリーグ）である。タブリーグは北インドを起源とし、個人の改革と精神的な向上を強調する、宣教を活動の中心に据えた組織である<sup>20)</sup>。ヤラー県に宣教センターを設置しており、国内外で独特のネットワークを構築している。しかし、あくまで個人の宣教を中心とする活動形態から、深南部での組織的影響力は限定的である。本稿で注目したいのは、サラフィー主義である。

サラフィー主義とは元来、19世紀後半からイスラームと近代文明の調和を目指して展開したイスラーム改革の中心的な思想潮流である。預言者ムハンマドを筆頭とする先人（サラフ）の時代の原典であるクルアーンとハディース（預言者の言行

録）の字義に則った解釈を推奨することや、後代に付け加わった慣行やスーフイーなどの権威をビドア（アラビア語でイスラームからの逸脱）として糾弾する傾向を伴う。深南部では、こうした傾向を持つ人物は、サーイ・マイもしくはカナ・マイ（以下改革派）と呼ばれることが多かった<sup>21)</sup>。サラフィー主義は、エジプトのムスリム同胞団の活動にみられるように、イスラームに基づく国家・社会改革を目指す運動を伴う場合があるため、しばしば国家安全保障の脅威とみなされる。しかし、深南部紛争の文脈では、分離独立運動にかかわったとして逮捕された改革派はいない。

80年代にサウジアラビアに留学した指導者らが、タイのサラフィー主義をけん引してきた。なかでも、1989年にサウジアラビアでの留学を終えて帰国したイスマイル・ルッフィー・チャパキヤー（以下ルッフィー）は、タイのイスラーム復興運動の流れを率いる代表的な存在である<sup>22)</sup>。ルッフィーの一族は、パッターニー県にあるバムルン・イスラーム・ウィタヤー学校を運営している。私立イスラーム学校として登録される前は伝統的なポーノであり、氏の父は伝統的なポーノのバーボーとして教育を行ってきた。ルッフィーの帰国後、同校はワッハーブ派<sup>23)</sup>の学校として知られるようになっていく [Joll 2011: 50]。

ルッフィーは国会議員やタイ国のアミール・ハジ（メッカ巡礼の引率者）を務めた経験を持ち、政府や現国王ラーマ10世とのつながりも強い。氏の思想には、サラフィー主義的な要素が反映されている。例えば、人間であるウラマーが無謬であるとは限らないとして、クルアーンとハディースに従うことを旨とすべきとする点や、ムハンマドの知識や行為をできるだけ反映するためのイス

ラーム教育の近代化といった点は、サラフィー主義に特徴的である。ルッフィーの思想は、字義主義的要素と柔軟性とを兼ね備えたものではあるが、評価はさまざまである。東南アジアのイスラーム主義研究を行ってきたリョウは、ルッフィーと伝統的イスラーム解釈を重視する人々との間での対立を指摘しつつも、氏がイスラーム学者として深南部で生じている暴力行為に対する批判を行い、政府と現地の人々との対話を後押ししてきた点について肯定的な評価を行っている [Liow 2009a: 202-204]。タイのイスラーム研究者であるイムティヤーズは、ルッフィーをサウジアラビア方式のワッハーブ主義者であり、ワッハーブ主義に顕著にみられる厳格な直解主義、違いに対する不寛容、女性の権利に対する制限、芸術に対する敵対的態度、という特徴があると評価する。結果として、深南部ではイスラームのアラブ化が進んだとしている [Imtiyaz 2007: 12]。

改革派の影響は、高等教育機関において顕著に見られる。ルッフィーは、1998年にタイで初めての私立イスラーム大学であるヤラー・イスラーム大学（現ファートニー大学）を、サウジアラビアのイスラーム開発銀行の支援の下で設立した。国立大学では、1989年ソクラーナカリン大学パターンニー校にウィタヤーライ・イスラームスクサー（イスラーム学部）が設置され、1998年から修士、2006年から博士のプログラムを提供している<sup>24)</sup>。また、ラーチャパット・ヤラー大学では2013年からイスラーム教育学の学士、修士が取得可能である。2005年には、ナラーティワート県のナラーティワート・ラーチャナカリン大学にイスラーム・アラブ学院が設立され、しだいに深南部におけるイスラーム高等教育の環境が整備されて

きた。こうした大学機関が、深南部の初等・中等イスラーム教育にも、カリキュラム制定や教員訓練を通じて広く関与している。

改革派は、サラフィー主義的な基準からは非イスラーム的であるとみなされる伝統的な実践を批判の対象としている<sup>25)</sup>。また、現地でパーサー・イスラーム（イスラームの言葉）と表現されることもあるマレー語を、イスラームにとって不可分な要素だとは捉えない。そして、近代教育をイスラーム的観点からも積極的に捉える。さらに、イスラームの知識を得る際に、サラフィー主義者として知られる学者を参照する。このような傾向の故に、改革派は深南部の伝統や社会の破壊者として否定的に捉えられる場合があるのである。本稿では、便宜的に改革派の影響が見られない、あるいは改革派に対して否定的な人々のことを伝統派と表現する<sup>26)</sup>。

### 3. イスラームと帰属意識

#### (1) イスラームとタイ語

ルーソ郡は2004年以降、銃撃事件や爆弾テロ事件が多発し、政府にプーンティー・シーデー（危険地帯）指定されている。また、都市部や高等教育機関を中心に展開する改革派の影響が強くない伝統派の地域であるとみなされてきた。紛争の激化によって、中国系、仏教徒の多くがこの地を去っていったといわれている。

ルーソ郡には9つのタンボン（町）、71のムーバーン（村）がある。公立小学校が38校、公立中学・高校が2校、普通教育のみを行う私立学校（以下私立学校）が5校、宗教課程を併せて行う私立イスラーム学校（以下私立イスラーム学校）が

5校、私立学校法の15条第2項学校が1校ある<sup>27)</sup>。また、ターディーカーが81校、伝統的なポーノは8校ある。聞き取り調査の補助を目的として配布した質問票に対して、マレー・ムスリムの教育関係者243名の協力が得られた<sup>28)</sup>。以下では、質問票の回答結果を参考としてあわせて紹介しながら、イスラーム教育をめぐる語りを検討していきたい<sup>29)</sup>。

まず、検討を行うのは、言語についてである。深南部のムスリムの間で、クルアーンや基本的な宗教用語はアラビア語で覚えるという前提が共有されているとしても、内容を教える・学ぶ言語となると意見が分かれる。タイ語を用いることが一般化するなかで、依然としてマレー語が深南部のマレー・ムスリムにとって母語であるという意識は強く、また、イスラームと分かち難く結びついている。BRNの創始者がかつて教えていた私立イスラーム学校の校長は、このように言っている。

マレー語は我々にとっての母語です。我々大人は、マレー語を子供達に教える責任があります。母語を失ってしまったら、私達は私達ではなくなってしまうでしょう。我々の学校は、ヤーウィを子供たちがきちんと読み、書くことができるように教育しています<sup>30)</sup>。

ポーノやターディーカーで使用されるのはマレー語であり、とくに村落部では、バイクや自動車免許の取得・更新や役所への報告書作成を除いて日常でタイ語を用いることが少ない。そのような場では、このターディーカー教員のような語りが聞かれることがある。

私は、タイ語を話すのが好きではありません。私たちの母語はマレー語なので、うまく話すことができませんし、村の生活でタイ語を話す必要もありません。とくに、イスラームに関する知識は、タイ語では伝えることはできません。マレー語はイスラームの言葉でもあります。イスラームはマレー語で学ぶ必要があります<sup>31)</sup>。

一方、ルーソ郡で最も規模が大きい私立学校の宗教科教員2名は、私立イスラーム学校を卒業しサナウィヤ修了資格を持つが、大学でイスラーム学を専攻していない。イスラームとマレー語を結びつける考え方を否定するとともに、イスラームはタイ語であっても学べることを強調した。

「タイ語でイスラーム教育を行うことが可能か」という問いに対して、全回答者のうち201名(83%)が「そう思う」としている。「マレー語でイスラーム教育を行うことが可能か」という問いについては218名(90%)が「そう思う」としており、大きな差はみられない(表1)。ここから、校長や学校管理者を除き、宗教科教員と普通科教員の回答をまとめると表2・3のようになる。タイ語でイスラーム教育を行うことが可能か、という点について否定的である普通科教員が1割に満たないのに対して、宗教科教員の3割近くが否定的に捉えている。

現地では、教員のみならず人々の間に、イスラーム教育をマレー語と結びつけて捉える傾向が存在している。その傾向は、とくに宗教科教員の間で強くみられた。一方で、タイ語は普通科目の教育や、進学・就職に結びつけられる。タイ語は、パーサー・ラーチャカーン(公務の言葉)であり、

生活の為に身に着ける必要がある。そのなかで、村落部にある公立学校のマレー・ムスリムの校長は、イスラームと言語のかかわりについてこう述べている。

私達の生きている世界では、この土地はタイに属しています。タイ語を学ぶことは、この世を生きるために必要なことです。それだけではなく、タイ語を使ったからといって、イスラームを学ぶことができないと言えるでしょうか。分離独立派組織やこの地域の人々の多くは勘違いをしています。言葉は関係ないのです。イスラーム教徒として学ぶ必要があるのはアラビア語でしょう<sup>32)</sup>。

## (2) 真にイスラーム的であること

イスラームは、生き方そのものであるといわれる。イスラームがその他の一神教と異なって特徴的であるのは、聖俗の区別がなく、人生におけるあらゆる行為がイスラームの枠組みで捉えられる点である。「知識を得ることは、すべてのムスリムにとっての義務である」というハディースを引用するまでもなく、教育はムスリムにとって重要な点である。また、いまやイスラームの知識は一部の権威に属するものではなく、一般に開かれている。以下で検討したいのは、イスラームの知識をめぐる語りである。

表1 イスラーム教育と言語

	強くそう思う／ そう思う		そう思わない／ 強くそう思わない		分からない		合計
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	
タイ語でイスラーム教育が可能	201人	83%	32人	13%	10人	4%	243人
マレー語でイスラーム教育が可能	218人	90%	15人	6%	10人	4%	243人

出典：筆者作成

表2 タイ語でイスラーム教育が可能である

	強くそう思う／ そう思う		そう思わない／ 強くそう思わない		分からない		合計
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	
宗教科教員	46人	66%	21人	30%	3人	4%	70人
普通科教員	150人	90%	10人	6%	7人	4%	167人

総数 237人

出典：筆者作成

表3 マレー語でイスラーム教育が可能である

	強くそう思う／ そう思う		そう思わない／ 強くそう思わない		分からない		合計
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	
宗教科教員	64人	91%	3人	4%	3人	4%	70人
普通科教員	148人	89%	12人	7%	7人	4%	167人

総数 237人

出典：筆者作成

ポーノやターディーカーの教員は頑固です。数学やコンピューター、科学を絶対に受け入れないポーノの方がむしろ、セキュラリズムの考え方に影響を受けていると思いませんか<sup>33)</sup>。

ある大学教員は、このような疑問を筆者に投げかけた。学校教育において、普通科目の教育を否定する教員はいない。しかし、それらをイスラーム教育の枠組みで捉えるか、という点になると意見は一様ではない。学校におけるイスラーム教育のタイ語化がすすめられてきたとはいえ、深南部では普通教育がタイ語で、イスラーム教育はマレー語で行われるのが一般的であったという経緯も大きく影響している。歴史のなかで積み重ねられてきたイスラーム教育の伝統を破壊しうるものをできる限り排除するという考えと、イスラームはすべてを規定するからこそ普通科目をも積極的に取り込むという考えがある。こうした考えが、言語と帰属意識の問題とも複雑に絡み合って展開していることが、この私立イスラーム学校の宗教科教員の発言からもうかがえる。

タイ政府は数学やコンピューターなど一見中立的にみえる科目を教えて、地域の文化や言葉、宗教を破壊し、植民地化しようとしているのです<sup>34)</sup>。

宗教科目と普通科目を分けることで、伝統的なイスラーム教育を守るという考えは根強くある。他方で、普通科目をイスラーム的観点からも積極的に取り込もうとする改革派的な考えがある。「この地域に相応しいカリキュラムについてどう思うか」という質問に関して、宗教科目と普通科目のカリキュラムを分離すべきと回答したのは、全回答者のうち76名(31%)であった。他方、宗教科目と普通科目を統合したカリキュラムを用いるべきであるとしたのは142名(58%)であった(表4)。ただ、ルーソ郡の村落部にある私立イスラーム学校の普通科教員によると、改革派の影響だけではなく、宗教教育課程と普通教育課程との整合性という現実的要請がある。こうした状況が、学者や教育省担当官が作成する統合カリキュラムの導入拡大につながっているという<sup>35)</sup>。

カリキュラムというかたちで知識を一定期間で学べるようパッケージ化し、試験で測るという行為は近代的な学校教育に特徴的な点である。伝統的な教育を重視する人々の間では、近年のイスラーム教育はイスラームの味付けをした紋切り型の知識を子供たちに覚えさせているだけで、根本的な教えや知恵を理解することに結びついていないという懸念が聞かれる。先の私立イスラーム学校の校長は、改革派に言及しながらこのようにいった。

表4 この地域に相応しいカリキュラムについてどう思うか

宗教科目と普通科目のカリキュラムを分離すべき	76人	31%
統合したカリキュラムを用いるべき	142人	58%
分からない	25人	10%
合計	243人	

出典：筆者作成

改革派は、自分たちこそが本物のイスラームだと主張していますが、それは、天国への片道チケットを手に入れようと楽をしているに過ぎないのです。イスラームを学ぶ道のりはそのように簡単なものではありません<sup>36)</sup>。

バーボーを親戚にもつ、ルーソ郡唯一の私立学校法15条第2項学校の管理者は、400年以上の歴史があるポーノと学校におけるイスラーム教育を比較すること自体に否定的である。

バーボーとなるには、修士や博士と違って、あらゆる知識を持っていなくてはなりません。イスラームの知識を試験で測ることはできませんし、ポーノを学校と比べることはできません<sup>37)</sup>。

学校制度内のイスラーム教育では、政府のカリキュラムにもみられるように、クルアーンとハディースに依拠して学習すべき点を明確化し、合理的に学ぶことが重視される傾向がある。こうした傾向は、伝統的なイスラーム教育が非合理的であるとの評価に結びつく場合もある。しかし、試験の点数が高いことがすなわちイスラームの知識を身に着けたということの意味しない、という認

識も多くの教員の間には存在している。「試験で評価することがイスラーム教育にとって大切である」という問いに対しては8割以上が賛成しているものの、「イスラームの知識を試験で測ることができる」という問いに対しては7割が否定的であった(表5)。

伝統的イスラーム教育が相対化されるなかで、イスラームに関する知識を得る際に誰(何)を参照するのか、という点も多様化している。村落部にあるターディーカーの校長は、自身が改革派であることを公言し、サラフィー主義の宣教師ザキール・ナイックのタイ語字幕付き講演を視聴すべきであるとした<sup>38)</sup>。また、ワッハーブ主義に共感すると言及した公立学校の宗教科教員は、知識を得る際に地域のイマームではなくルッフィーを参照しているという<sup>39)</sup>。改革派への明確な支持を示した9名の教員のなかでは、両者の講演録をインターネット上で視聴していることが度々言及された。また全員が、信仰が否定されない限りタイ国家の支配をイスラーム的にも問題視する必要がないことを強調した。一方、タイ政府をカーフィル(異教徒)である、分離独立運動にかかわる戦闘員は抑圧的なタイ政府に対するジハードを行っていると言及した7名の教員は、主にタイ語以外の情報源から知識を得ているとし、ルッフィーな

表5 イスラーム教育と試験

	強く思う／ そう思う		そう思わない／ 強く思わない		分からない		合計
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	
試験で評価することが イスラーム教育において大切である	206人	85%	29人	12%	8人	3%	243人
イスラームの知識は試験で 図ることができる	66人	27%	169人	70%	8人	3%	243人

出典：筆者作成

ど改革派に対してコミュニティに対する脅威であるとして否定的でもあった<sup>40)</sup>。

ルーソ郡は伝統派の要素が強い地域であるとされるが、イスラーム教育の場からみると、改革派の影響、あるいは改革派的な価値観は静かに広まっていることがうかがえる。改革派は、タイの学校制度内におけるイスラーム教育との親和性がより高い。イスラームと帰属意識をめぐる認識の違いは、ある程度は、改革派と伝統派という枠組みで捉えることが可能であろう。しかし、実際はよりニュアンスに富んだものであって、決して二項対立的に捉えるべきではない。すべてのムスリムに共通する最も重要な目的が、来世に楽園での永遠の生を得ることであり、そのためにイスラームの教えに従って生きることが求められる。しかし、何を以て真にイスラーム的であるとするのかという点については、タイ国家との歴史的なかわりに強く影響を受けるかたちで、深南部のムスリムの間で確かに緊張関係が存在しているのである。

## おわりに

タイ政府と深南部との相互作用のなかで、深南部のイスラーム教育自体が大きく変化を遂げた。この変化には、タイ政府による同化・統合政策のみならず、イスラーム内部からの改革の動きが大きく影響している。タイでは、1980年代以降のイスラーム復興運動のなかで、サラフィー主義的な思想潮流の影響が観察されるようになった。深南部におけるイスラーム復興の動きは、1980年代にサウジアラビアでイスラームを学び、帰国した深南部出身の指導者によって率いられてきた。改革派は高等教育機関を中心に、初等教育・中等教育

を含めて、深南部のイスラーム教育全体に影響を及ぼしている。

既存権力の否定につながりうるサラフィー主義は、諸外国では過激派として国家安全保障上の脅威とみなされることが多い。しかしタイの文脈において、政府の側からみると、むしろムスリムの穏健化をもたらした存在であるといえる。イスラームの原典への回帰を志向する改革派は、深南部で伝統的に行われてきた実践に否定的である。また、マレー語をイスラームにとって不可分な要素とせず、タイ語でのイスラーム教育を肯定する傾向も強い。イスラームを上位に掲げる改革派の動きは、深南部においてマレーとしての帰属意識を相対化する方向で作用し、結果としてタイ政府が目指すものとの一致をもたらした。改革派にとっても、タイ政府にとっても、標的はマレー民族主義の要素が強い伝統派であったためである。

改革派は、タイ国家の枠組みのなかに自身を位置付けることに成功し、マレー・ムスリムの地位の向上という点においては、武器ではなくタイ社会に参入し適応する道を選んだ。こうした意味において、タイ政府そして改革派が進めてきたイスラーム教育は、マレー・ムスリムのタイへの統合を促したといえる。ただ、統合が進んでいるという事実は決して、マレー・ムスリムの間で、多数派のタイ人とは異なるという感覚を必ずしも減少させていることを意味しない点にも留意する必要がある。

最後に、タイ政府との抗争にかかわったとして逮捕された改革派はいないという現状を踏まえて、深南部紛争の激化・持続という問題を考えてみると、過激化は改革派の影響というよりはむしろ、イスラーム復興とタイ化の間で生じているマ

レー・ムスリムとしての帰属意識の揺らぎ、という観点から捉えることが可能かもしれない。本稿では、伝統派を一枚岩的に扱ってしまったものの、2004年以降の紛争を理解するには、深南部の伝統派内部での多様性を考察する視点が必要となってくる。また、本稿では、回答者の属性、人口構成、地域経済、地理的背景によって、イスラームをめぐる語りが大きく規定されている可能性について詳しく検討をすることができなかつた<sup>41)</sup>。とくに、2004年以降、ムスリム人口が圧倒的に多数となった地域では、日常生活で目にする仏教徒は軍人であるという事実も考慮する必要があるだろう。これらについては今後の課題としたい。

## 註

- 1) 紛争の文脈では南部国境3県（パッターニー、ヤラー、ナラーティワート）に加え、ソンクラーク南部のチャナ、テーパー、ナータウィー、サバーヨーイ郡が含まれる。本稿では、現地での呼称としては一般的ではないものの、県境にとらわれない概念として深南部を用いた。また、本稿の一部は博士学位論文の成果に基づいている。
- 2) 本稿でマレー語とする場合には、マレー語パタニ方言とヤーウィを含むものとして用いる。東南アジア島嶼部で用いられるマレー語のアラビア文字表記法であるジャウィ（タイ語ではヤーウィ）は、イスラーム世界でも古くから認知されてきた。本稿では、マレー系の旧王国名、深南部地域で話される方言、組織名がマレー語で *patani* と表記される場合は、県名であるパッターニーとの差異化を目的としてパタニと記載した。
- 3) 例えば、ASEAN事務局長を務めた故スリン・ピッサワン [Surin 1982]、マレー・ムスリムの活動家・研究者であるワンカーデー・チェマン [Wan Kadir 1990] は、マレー・ムスリムとしての帰属意識と分離独立運動とのつながりを指摘している。近年では、政治学者のマッカーゴが、タイ政府の抑圧的な同化・統合政策の結果として、マイノリティであるマレー・ムスリムの帰属意識が強化され、タイ政府による統治の正統性が深南部地域において問われる結果となっている状況を分析している [McCargo 2008]。また、政治学者のリョウは深南部のイスラーム教育と紛争に関する論考を行った著作のなかで、イスラーム教育そのものというより民族自決といった概念が紛争に影響を与えていることを指摘している [Liow 2009b]。
- 4) この点についてジョリーの考察が参考になる [Jory 2007]。2004年以降、タイ政府とマレー・ムスリムの対立として描かれることが多くなったが、政治学者のアスキューは、自らを喜んでタイ人であると規定し、王室への忠誠を隠そうともしないマレー・ムスリムの様子から、マレー民族主義者とタイ政府という構図が、エリート主義的な分離独立運動研究によって誇張されてきた側面を指摘している [Askew 2010: 144-146]。また、2004年以降、仏教僧、仏教徒住民の殺害事件や斬首が起こったこと、ムスリム市民の多くが犠牲になっていることから、イスラーム的な要素が重要になってきたことが指摘されるようになった [Abuza 2006, Andre 2013]。
- 5) 2015年5月から10月、2016年2月から3月、8月から9月、ルーソ郡を中心に深南部で現地調査を行った。
- 6) 和平交渉については、パタニ・フォーラムの報告書が参考になる [Patani Forum 2012]。
- 7) 当初私立学校法が目的としていたのは、中国系の教育機関の管理統制であった。のちに、1936年、1954年、1975年、1982年、2007年に改正されている。
- 8) サナウィヤは、1971～76年の私立イスラーム学校開発計画で3年に改編され、1980年に公布されたカリキュラム以降は4・3・3の10段階となった。宗教課程教育は中等教育以上に限定されたことから、6年の普通教育課程と10段階の宗教教育課程の整合性が私立イスラーム学校にとっての課題となった。
- 9) マレー・ムスリム統合政策と分離独立運動の展開については、橋本の論文が参考になる [橋本 1987]。
- 10) 計画は、のちに1986年まで延長された。
- 11) 私立イスラーム教育については、1970年、1980年、1992年、1997年、2003年にイスラーム教育カリキュラムが出されている。カリキュラムの内容については、鈴木が詳細な検討を行っている [鈴木 2005]。
- 12) I-NETの受験資格があるのは、①私立イスラーム学校、②ターディーカー、③教育省基礎教育委員会との連携下にある公立学校に在籍する、各課程の最終年度の学生である。
- 13) ルーソ郡内の私立イスラーム学校には、政府の教科



- 書を全く使用しない学校も存在した。
- 14) 教育省基礎教育委員会のイスラーム教育カリキュラム策定担当官に対するインタビュー（バンコク、2016年9月6日）。
  - 15) ルーソ郡では学校によって週2時間の「イスラームの学習内容」に加えて、7～12時間のイスラーム教育を実施する学校が存在した。また、教授言語としてマレー語が用いられるケースが見られた。
  - 16) 2015年8月3日インタビュー。
  - 17) ルーソ郡私立教育委員会発行資料と聞き取り調査に基づく [Office of Private Education Rueso District 2016]。
  - 18) 例えば、パッターニー県のある私立イスラーム学校は、サウジアラビアで7年、スーダンの大学でシャリーア法を4年学んで帰国した現校長の父によって設立された。政府の管理下に入る以前の1960年代頃までは、アラビア語で普通科目、数学、科学、地理の教育を行っていた。
  - 19) イスラーム改革思想の延長上に、サラフィー主義を含むイスラーム主義がある。イスラーム主義に関しては、末近が起源、歴史、ジハード主義との関係も踏まえた検討を行っており参考になる [末近 2018]。
  - 20) タブリーグは、預言者ムハンマドと彼に献身した教友たちが送った信仰生活を理想とし、モスクにおける一定期間の共同生活と超俗的な宣教活動を行う。タイ各地に60ほどクルアーン読誦を学ぶノン・フォーマル教育機関をもち、修了者はパキスタンなど海外のタブリーグ関連機関に進学する。タイ政府は、政治にかかわらない姿勢を明確に掲げるタブリーグの活動を積極的に支援してきた [Liow 2009a: 199]。タイ南部におけるタブリーグの影響については、小河が詳細な検討を行っている [小河 2016]。ジョルはタブリーグをイスラーム復興主義 (Islamic revivalism)、サラフィー主義をイスラーム改革主義 (Islamic reformism) として類型化している [Joll 2011:46-48]。
  - 21) サイー・マイ (カナ・マイ) や、それに対して伝統派を示すサーイ・カオ (カナ・カオ) は、自称として用いられる場合もある。
  - 22) ルッフィーは、マディナ大学で学士号を得たのち、アル・イマーム・モハメッド・イブン・サウド・イスラーム大学から比較イスラーム法学で修士号・博士号を取得した。
  - 23) 改革派は、しばしば他称としてワッハービー (ワッハーブ派) と呼ばれる。ワッハーブ派とは、18世紀半ばにアラビア半島に出現した急進的イスラーム改革運動で、サウジアラビア建国の支柱となった思想であるが、自称としては用いられない。ワッハービーという言葉が用いられる場合、タイ深南部に限らず否定的なニュアンスが伴う。
  - 24) 同大学は、1974年からエジプト、サウジアラビアの援助の下で人文科学・社会学部の学科科目としてイスラーム科目を開講してきた [Ibrahem and Numan 2010: 144-145]。
  - 25) 例えば、ラマダン明けのハリラヤの日に墓地に参集し会食を行うこと、ハリラヤの7日後をハリラヤの日と同様に祝うハリラヤ・エナム、教義上は1両日で済ませる必要がある葬送儀礼を数日かけて行うことや、マウリド (ムハンマドの生誕祭) など、深南部で伝統的に行われてきたイスラームの実践・儀礼をビドアであるとする。
  - 26) 伝統派とは、シャーフィイー学派の伝統的解釈に依拠するポーノ、ターディーカー、私立イスラーム学校などの指導者を中心とする。歴史のなかで積み重ねられてきた伝統についても、イスラームを構成する要素として重視する人々を広く指すが、その内実は多様である。本稿では、便宜的に改革派に対して否定的な人々とした。
  - 27) 私立学校はすべて幼稚園から小学校であり、私立イスラーム学校は小学校が1校、中高一貫校が4校である。私立学校法15条2項学校は、私立イスラーム学校としての登録は行っているものの普通科目の教育を行っておらず、実態はポーノと同様である場合が多い。
  - 28) マレー・ムスリムであるかの判断は自称のほか、宗教、母語、民族、出身地に関する質問に基づいて総合的に判断をした。コン・ナイ・ブーンティー、ナーユー、マラーユー、マラーユー・ムスリムが、国籍との関係ではマラーユー・タイ、コンタイ・チュアサイマラーユーという自称がしばしば用いられた。民族 (チュアチャート) をどう捉えるかについては、筆者、回答者自身だけでなく、研究者やタイ政府の間でも概念にずれや混乱があることは否定できない。この問題については、別稿の課題としたい。
  - 29) なお、調査にはルーソ郡出身、ソクラーナカリン大学マレー語学科の卒業者がアシスタントとして同行した。
  - 30) 2015年8月11日インタビュー。
  - 31) 2015年9月19日インタビュー。
  - 32) 2015年9月7日インタビュー。
  - 33) ソクラーナカリン大学イスラーム学部でのインタビュー、パッターニー県、2015年2月13日。

- 34) 2015年9月7日インタビュー。
- 35) 2015年9月7日インタビュー。
- 36) 前掲注30と同様人物。
- 37) 2015年7月31日インタビュー
- 38) 2016年2月13日インタビュー。
- 39) 2015年10月9日インタビュー。
- 40) ターディーカー教員と私立イスラーム学校教員の宗教科教員が含まれ、そのうち2名は東ジャワへの留学経験があった。インドネシアとのかかわりがどのような意味を持ちうるのかについては、慎重に検討をする必要がある。改革派、伝統派にかかわらず共通してみられたのは、人物を介してのみならず、SNSやインターネットを通じてイスラームに関する知識を得ている点である。
- 41) タイ語による普通教育に対するニーズや、高等教育の必要性に対する認識も、こうした点に影響を受けていると考えられる。教育とムスリム学生の価値観の関係については柴山と尾中の著作が参考になる [柴山 2009, 尾中 2015]。

## 参考文献

- 小河久志 2016 『正しい』イスラームをめぐるダイナミズム—タイ南部ムスリム村落の宗教民族誌— 大阪大学出版会。
- 尾中文哉 2015 『進学』の比較社会学—三つのタイ農村における「地域文化」との係わりで— ハーベスト社。
- 小野沢正喜 1985 「タイにおける文化的同化政策の展開と少数民族のエスニック・アイデンティティ—南タイ・イスラム社会の教育体系の変容を中心として—」『多文化教育の比較研究—教育における文化的同化と多様化—』九州大学出版会。
- 柴山信二郎 2009 「タイ深南部における教育機関の多様化とムスリム学生の価値観」早稲田大学大学院人間科学研究科博士學位論文。
- 鈴木康郎 2005 「タイの基礎教育改革におけるイスラームへの対応」『比較教育学研究第31号』。
- 1999 「南部タイの国立小学校・中等学校におけるイスラム教育の試み」『比較教育学研究第25号』。
- 末近浩太 2018 『イスラーム主義—もう一つの近代を構想する』岩波書店。
- 橋本卓 1987 「タイ南部国境県問題とマレー・ムスリム統合政策」『東南アジア研究』25巻2号。
- 村田翼夫 2007 『タイにおける教育発展 国民統合・文化・教育協力』東信堂。
- Abuza, Zachary 2006. “The Islamist Insurgency in Thailand.” *Current Trends in Islamist Ideology*, Vol.4, pp.89-98.
- Andre, Virginie 2013. “From Colonialist to Infidel: Framing the Enemy in Southern Thailand’s ‘Cosmic War’”, In Camilleri, Joseph and Schottnann, Sven eds., *Culture, Religion and Conflict in Muslim Southeast Asia: Negotiating Tense Pluralisms*, London: Routledge, pp.109-125.
- Askew, Marc 2010. “Fighting with Ghosts: Querying Thailand’s “Southern Fire””, *Contemporary Southeast Asia: A Journal of International and Strategic Affairs*, Vol.32, No.2, pp.117-155.
- Ibrahim Narongraksakhet 2005. “Pondoks and Their Roles in Preserving Muslim Identity in Southern Border Provinces of Thailand.” In Utai Dulyakasem and Lertchai Sirichai eds. *Knowledge and Conflict Resolution: The Crisis of the Border Region of Southern Thailand*, Nakhon Si Thammarat: School of Liberal Arts, Walailak University.
- Ibrahim Narongraksakhet and Numan Hayimasae 2010. *Thrisadimai Sathaban Kansueksa Muslim Changwat Chaidaeen Paktai*, Pattani: Salatan kanwichai lae wichakan.
- Imitiyaz Yusuf 2007. “Faces of Islam in Southern Thailand.” East-West Center Washington Working Papers, No.7 Washington DC: East-West Center Washington.
- International Crisis Group 2017. Jihadism in southern Thailand: A Phantom Menace, Asia Report No.291. (<https://www.crisisgroup.org/asia/south-east-asia/thailand/291-jihadism-southern-thailand-phantom-menace>) (Accessed February 1, 2018).
- Joll, Christopher M. 2011. *Muslim Merit-making in Thailand's Far-south.*, New York: Springer Science & Business Media.
- Jory, Patrick 2007. “From Melayu Patani to Thai Muslim: The Spectre of Ethnic Identity in Southern Thailand”, *South East Asia Research*, Vol.15, No.2, pp.255-279.
- Kanniga Sachakul 1984. “Education as a Means for National Integration: Historical and Comparative Study of Chinese and Muslim

- Assimilation in Thailand”, Ph.D. Dissertation, University of Michigan.
- Liow, Joseph Chinyong 2009a. “Local Networks and Transnational Islam in Thailand (with emphasis on the southernmost provinces),” *NBR Project Report*, The National Bureau of Asian Research.
- 2009b. *Islam, Education, and Reform in Southern Thailand: Tradition & Transformation.*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- McCargo, Duncan 2008. *Tearing apart the land: Islam and legitimacy in Southern Thailand.*, Ithaca: Cornell University Press.
- Mirafat Mayusoh 2008. “Baepyang Chariyatham khong Khru Islamsueksa nai Rongrien Prathomsueksa Changwat Narathiwat Tam Thasana khong Phuborihan lae Khru Islamsueksa”, Master Thesis, Prince of Songkla University.
- Muhammad Ilyas Yahprung 2014. “Islamic Reform and Revivalism in Southern Thailand: A Critical study of the Salafi Reform movement of Shaykh Dr. Ismail Lutfi Chapakia Al-Fatani”, Ph.D. Dissertation, International Islamic University of Malaysia.
- Muhammadryani Baka 2011. “Kanburanakan Sara lae Matrathan Kanriengru Chuang Chan thi 3 Samrap Rongrian Ekhachon Son Sasana Islam nai Changwat Chaidean Phaktai”, Ph.D. Dissertation, Prince of Songkla University.
- Nilsen, Marte and Hara Shintaro 2017. “Religious Motivation in Political Struggle: The Case of Thailand’s Patani Conflict”, *Journal of Religion and Violence*, Vol.5 No.3, pp.1-20.
- Numan Hayimasae 2010. “Malay-Muslim Educational Institutions in South Thailand (1930-1990)”, Ph.D. Dissertation, University of Science Malaysia.
- Ockey, James 2011. “Individual Imaginings: The Religio-nationalist Pilgrimages of Haji Sulong Abdulkadir al-Fatani”, *Journal of Southeast Asian Studies*, Volume 42, Issue 1m pp.88-119.
- Office of the Basic Education Commission 2016. *Rai-ngan Phon Kandamnoen-ngan Khrongkaan Phatthana Rupbaep Kanchatkansueksa nai Khetphathanaphiset Chaphokit Changwat Chaidan Phaktai Pracham Pingoppraman Po. so. 2558*, Bangkok: Office of the Basic Education Commission.
- Office of Private Education Rueso District 2016. *Khomun Phunthan Sathabansueksa Pono Amphoe Rueso Changwat Narathiwat Pracham Pi 2558.*, Rueso: Office of Private Education.
- Ornanong Noiwong 2001. “Political Integration Policies and Strategies of the Thai Government toward the Malay-Muslims of Southernmost Thailand (1973-2000)”, Ph.D. Dissertation, Northern Illinois University.
- Patani Forum 2012. *Kan Ceraca Santiphap Rawang Muslim Malayu lae Rat Thai*, Pattani: Patani Forum.
- Surin Pitsuwan 1982. “Islam and Malay Nationalism: A Case Study of Malay-Muslims of Southern. Thailand”, Ph.D. Dissertation, Harvard University.
- The World Bank 2015. “Youth Group Builds Peace through Education in Southern Thailand” (URL <http://www.worldbank.org/en/news/feature/2015/12/21/youth-group-builds-peace-through-education-in-southern-thailand>) (Accessed February 10, 2018).
- Wan Kadir Che Man 1990. *Muslim Separatism: The Moros of Southern Philippines and the Malays of Southern Thailand.*, Singapore: Oxford University Press.